

キゴ山プラネタリウムで社会を学ぶ ～星と自然の魅力を発信～

団体名●辰島プレゼミナール／代表者名●辰島裕美(女子短期大学部・准教授)

はじめに

この取り組みは、授業の課題としてキゴ山ふれあい研修センター(以下、センター)を紹介したり、センターでのイベントを企画運営したりしながら、学生が情報発信の技術を習得すると同時に、体験を通して、気付きを得ることを目標としている。

2021年度の短期大学部の基礎科目「プレゼンテーション」(1年後期配置：必履修科目)において、動画作成のために現地取材し、活動が始まった。学生たちが訪れたこの施設で、まず、プラネタリウム見学した。その後、実際に学生が自身の目で見たリアルな星空が、自分達の心を癒し浄化して、帰るころには心が美しくなっていると、口々に語った。このような癒しの場所が金沢市の中心から近くにあり、それを、多くの人に発信することを動画作成のテーマとした。

一方、このセンターは、市内外の児童生徒が合宿に来る教育施設であるが、せっかくの自然あふれる素晴らしい場所が、近年、路線バスの廃止に伴い、一般の来訪者が減っていることも課題の一つとなっていた。

学生が、情報の扱い方を学ぶことと、センターやプラネタリウムの活動を、女子大生の視点で情報発信に協力することを、基礎科目やゼミナールの課題とした。本稿では、2021年から2年間のセンターとの協働で、学生の学外演習での学びを報告する。

活動内容

2年間、3科目の授業での活動を紹介する。

1, 2021年度	プレゼンテーション	130名
2, 2022年度	プレゼンテーション	125名
3, 2022年度	プレゼミナール	6名

< 1, 2021年度：宿泊体験から動画作成 >

2021年10月から、女子短大生が120名近く、3回に分かれて1泊を体験した。キゴ山を紹介する動画作成をテーマに写真や動画を撮影した。学生が宿泊した日は好天に恵まれ、輝く星空のもとで、キャンプファイヤーや天体観望を楽しんだ。一晩のうちに

何度も流れ星が出現し、コロナ禍の我慢を強いられていたこの年の学生たちにとって、友達と星空を見上げての感慨もひとしおだった。

感動的な現地の取材をもとに完成した動画の中で、優秀な作品は、2022年10月に金沢市文化ホールで開催された、宇宙シンポジウムで紹介された。

< 2, 2022年度：センター職員のアドバイス >

2022年度の同科目では、プラネタリウムのミニ番組の制作を試みた。事前の授業で、センターの職員が、センターの役割やキゴ山などの自然を紹介した。

2022年12月に、当該科目恒例のイベント授業として、100余名が4人グループの共同作業で各1動画の制作に挑戦、その後、相互評価を行った。

相互評価では、情報の受け手を意識する必要性を再確認することができた。例えば、小さい子ども向けであれば、漢字を避け簡単な言葉を使う、という単純なことも、対象者と狙いを意識することが必要となる。一見すると当たり前の些細なことも、自分達で実際に時間をかけて工夫し、他のチームの動画の表現も見て学べる。

さらに、1週間後の授業で、センター職員が講評のために再び来学した。実際に子供たちに関わるセンター職員からの指摘は、経験に基づいておりの確である。自分で工夫して、人の作品と見比べて、さらに職員からの意見も聞く。このようなプロセスで、当たり前のことでも、「腑に落ちる」気づきとなる。これが、外部講師の言葉として効果が強い。注意や激励、褒められる経験すべてが学生の心に残り、次のモチベーションにつながる。

< 3, 2022年度：少人数でイベント企画 >

2022年度後期には、プラネタリウムでの活動を研究テーマとしてゼミ生を募集した。プラネタリウムの星空解説員としてのナレーションを経験するための準備を開始した。そして、3月のイベント「よちよちプラネタリウム」というイベントを企画運営した。

活動の成果

「プレゼンテーション」科目で、100名を超える学生で活動を行う時と、ゼミナールとして少人数で専門的に活動に取り組めることの違いは大きい。この違いを、逆手にとって教育に利用することは可能である。人数の多い科目で地域をテーマにあげることは、社会やその他の課題を解決するゼミ活動の事前学習になる。身近な自然をテーマにすること自体、COVID19パンデミックによるネガティブなムードの転換を図ることになる。また、センターには、学生にセンターの存在や意義を認識させるチャンスとなる。続けて、少人数の活動で、センターの具体的な課題に取り組むことにつなげていける。

次に、プレゼミナールの活動と成果を紹介する。

「よちよちプラネタリウムの企画」

幼児とその家族を対象に、星を楽しむイベントである。小さな子どもと家族が、安心して参加できるようなプラネタリウムの星空解説と、その後、じゅうたんの部屋で、のんびりと時間を過ごしてもらう内容である。学生はこの後半のじゅうたんの部屋での活動を、企画運営した。

参加者に安全で楽しいひと時を過ごしてもらうことを目的に、活動内容の計画を練った。キゴ山に住む動物のイラストを描いて、星座シートに張り付ける工作と、色鉛筆で星のぬりえを楽しむ内容を企画した。学生からの、持ち帰ることができるというアイデアに、センターからはラミネート加工の機械を使わせてもらえることになった。

「準備の重要性と対応力の必要性」

本番を想定した練習が足りなかったが、職員のサポートもあって、大きなトラブルもなく終了した。終了後は、大きな達成感が得られた。学生の振り返りに、「練習を重ねても想定外のことが必ず起こるので、その場での対応力が必要」というものがあった。現実に体験してこそその気づきである。計画から実施、反省会まで通して、貴重な体験となった。



受付の様子

一方、センターからは、「準備次第で、工作がプログラムとして可能であるとわかった」と学生視点での提案に新規性と意外性を評価された。また、数人の学生がサポートすることで、限られた職員での活動内容を広げることが可能となった。学生が協力することへの感謝があった。



工作の作業説明をする学生

今後の課題、展望

2年間の3つの取り組みで得たことは、大人数の科目でテーマと技能のベースを定着できることである。また、その上で、少人数の活動で、さらに実際にセンターに貢献できる可能性がみえた。

次年度は、デジタルサイネージの活用と学生の星空案内で、さらにセンターと協力する。実社会での活動を通じた、学生の気づきと学びを研究する。